

吉蔵の成仏不成仏觀（八）

序

既に「吉蔵の成仏不成仏觀」⁽¹⁾と題して今まで、吉蔵（五四九—六二三）の思想を述べて来た。その要点は、①五千の増上慢と決定の増上慢は不成仏であるが、②これ以外の常不輕菩薩所對の増上慢も含む他の二乗はいずれかは成仏する事、③成仏する為には、一切衆生悉有仏性に相應する正因仏成の上に、更に發菩提心の緣因仏性を満す事、④五千の増上慢等が成仏できないのは、これらの二乗にも成仏可能な正因仏性があるにもかかわらず、法華教を信ぜず、緣因仏性である菩提心を發しようとしなからである事、⑤「從実相一法、出一切教」と、体より出生する用を総て仮りに肯定する為、相い矛盾する成仏説も不成仏説も認める事、⑥法華の会三歸一は道理、即ち正因仏性の点より論じ、一切は收入の對象となり、一切皆成仏説となる。しかし現実問題として、衆生がこ

の道理を不聞不信の場合には收入の對象とならず、不成仏の教説も成立する事、⑦実相の一法より出生した用の一切の教は、因緣仮名方便であり、相對的なものである。勿論三乗や一乗の教説も実相の一辺であり、絶對的なものではなく因緣の三乗一乗である。それを誤って絶對化し、一説に固執するが故に諍論となり、又不成仏の衆生が成立すると考える事、⑧無名相の実相の体より出生した名相の諸説は総て方便であり、善巧・実益・由漸の働きがある。三乗一乗の方便のこの働きにより、声聞をも成仏へと誘引する法華經は、「衆經の王」である事、⑨忍位以上になると惡趣に對し非折滅無為となり、成仏への道がなくなってしまう事等である。

一、阿羅漢の増上慢について

前回の拙論中にて、二種の増上慢を示した。即ち、

失の中の二人とは、第一には是れ未だ小乗を得ずして已

末 光 愛 正

に小乗を得たりと謂い、法華を信ぜざるなり。第二には已に小乗の果を得たれども、而も小乗の果は究竟に非ざるに自ら究竟と謂い大を追求せず。亦名けて失となす。

初は是れ凡の失にして、後は是れ聖の失なり。此の二に総じて一切の失の事を摂し尽くす。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九七頁下)

で、第一の増上慢は、未だ小乗の果を得ずして小乗の果を得たと思ひ込む五千の増上慢であることを、既に論述した。⁽²⁾そこで今回は、小乗の果、即ち阿羅漢果を得てはいるけれども、阿羅漢果が大乗に比べ究竟ではないにもかかわらず、究竟と思ひ込み、大乘に進求しない増上慢について論述する。

吉蔵は、小乗教を未究竟と考えるに對し、大乘の教を一応究竟・決定の法と考える。例えば華嚴經に對して、

仏初め成道して華嚴の會に諸の居士の為に、究竟の法を説き円満の身を明せり。(中略)、但し小器は未だ堪えざるが故に、鹿苑の會に一を隠して三を明し本を覆つて迹を開く。(後略)(前同、大正蔵三四卷、四八四頁上)

と、初成道の華嚴の會に、諸の菩薩居士の為に究竟の法を説く。但し、未堪の二乗小器の為に、鹿苑にて三乗の非究竟の教を説くと主張する。このことは般若等の大乘經典でも同じである。

旧は波若及び諸の方等經は皆法華よりも劣なり、故に是

れ法華の方便なりと明す。今明す、諸の菩薩等は波若の中に於て皆已に得悟せり。声聞は鈍根にして、菩薩の究竟の教を仮つて得悟の縁由となす。故に方便と云うのみ。是れ大品未だ究竟せざれば稱して方便とするには非ざるなり。故に前の文に云く、波若は是れ諸仏の密藏なり、但菩薩の為にのみ其の實事を演ぶと。即ち其の證なり。(法華義疏、卷第七、大正蔵三四卷、五五七頁上)

或は、

決定して大乘を説くとは、昔日言に小を説きしが意は大に在りて、教意に稱わざれば決定と名けず。今は言にも意にも俱に顯れぬれば、稱して決定となす。又大品等の經には顯に菩薩を教え、密に二乗を化す。菩薩に於ては是れ決定なれども、二乗に於ては未だ決定を得ざりき。

今は顯に菩薩を教え、顯に二乗を教うるが故に決定と名く。又大乗は是れ決定の法なり。涅槃經に師子吼をば決定の説と名く、謂く、諸の衆生に悉く仏性ありというが如し。今も亦決定して、衆生に於て悉く一乘ありと説く。道理として余性あることなく、唯仏性のみあるを以ての故に、仏性を説くを決定の説と名く。一乗も亦尔なり。(法華義疏、卷第四、大正蔵三四卷、五〇〇頁下)

と、波若等の方等經も、菩薩に於ては究竟決定の教えであるが、二乗に於ては方便説となる。しかし法華の現在に到つ

て、漸く二乗の大機が熟したるが故に、法華経は菩薩のみならず、二乗に対しても決定究竟の説となる。即ち、諸大乘經典は皆究竟の説であるが、「於一仏乘、分別説三」の三乗教は、二乗を究竟の大乘に導く為の善巧・実益・由漸の方便説である。それにもかかわらず、未究竟の方便の三乗教を、二乗は究竟と思ひ込む。

無数の方便を用うる所以は、衆生をして著を離れしめんが為の故なり。衆生三界に染著するを以て之を離れしめんと欲するが故に、三乗を説く。実に三乗の究竟せるありと言わざれども、汝還つて遂に三乗は究竟なりと保執せり。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四八七頁下)或は、

然昔欲示漸捨法門、故説五乘。稟教之徒不解仏意、遂保三乘皆是究竟也。(法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四一八頁中)

と、三界に染著するのを離れさせる為に、仮りに三乗を説き、更に一乗に導くつもりでいるにもかかわらず、仮りの三乗教を究竟の教と思ひ込んでしまふ。「凡涉名言、皆非究竟」の非究竟のものであり、諸説は漸捨されるものである。しかるに二乗は、三乗皆是究竟と執着してしまふのである。即ち、

羅漢を大乘に望むれば実に究竟に非ざるに、自らは究竟

と謂えり。自ら究竟と謂えるが故に仏道を進求せず。当に知るべし此は是れ増上慢の人なり。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九八頁上)

と、増上慢の定義を「実無謂有」とするならば、阿羅漢は大乘の究竟の法を實際には得ていない。にもかかわらず、方便の三乗の果を誤つて究竟と思ひ込むが故に、阿羅漢も増上慢の一種となるのである。前回論じた五千の増上慢とこの阿羅漢の増上慢の相違を次の様に論じている。

問う、今増上慢を明す。前の増上慢と何の異なるや。答う、上に己に積し竟れり。今更に異を明さば、初の人に二種の増上慢あり。一には未だ小の究竟を得ざるに小の究竟を得たりと謂う。是れ小乗の増上慢なり。二には此の妄情を保して復大乘を進求せず。謂く大乘の増上慢なり。後の人は已に小果を得たり。但し小果を大乘に望むれば究竟に非ざれども、究竟と謂う。但大の中の増上慢のみあって、小の中の慢はなきなり。問う、何を以てか兩人ありと知ることを得るや。答う、後の文に明す人は前の人に異れり。是の故に知る、二人は異なるということ。又前の文には凡の失を判ず。佛弟子に非ず、阿羅漢辟支仏に非ずという。故に知んぬ是れ凡夫の失なりということを。後の文に失を判ずるには、直に是れ増上慢なりと云えり。其れ既に是れ羅漢なれば、仏弟子に非ず及

び羅漢に非ずということを得ず。但自ら究竟と謂いて仏を志求せざるが故に、其に増上慢の名を与うるのみ。(前同頁)

その相違点は、五千の増上慢が、小乗の究竟の阿羅漢果を得ていないのにもかかわらず、得たと思ひ込む増上慢であるから、小乗中の増上慢であり、凡夫の失である。これに対し阿羅漢は、小乗の阿羅漢果が大乘に比較すれば、究竟でないにもかかわらずこれを究竟と思ひ込み、三乗教を漸捨せず、大乘に進求しない増上慢である。又大乘に対する増上慢であり、聖の失である。

それでは阿羅漢を得た増上慢とは、具体的には誰かと云う論議になる。

問う、此れ的には是れ何物の人ぞや。答う、通じて説かば一切の自ら究竟の羅漢と謂えるものなれども、而も正しく主たるは三根の声聞是なり。故に舍利弗云く、尔の時心に自ら滅度に至ることを得たりと謂いきと。乃至迦葉の中根なるも亦此の執を作せること、信解品及び化城に現ぜり。(前同、大正蔵三四卷、四九八頁上—中)

この羅漢の増上慢の対象範囲は、通論、つまり広義で解釈するならば、一切の自ら究竟と云う羅漢となる。しかし「正しく主たる」、つまり具体的な狭義の現実論で説くならば、舍利弗や迦葉等の三根の声聞となる。この三根の声聞は、

問う、凡夫の人は未だ羅漢を得ずして自ら究竟と謂い、聖人は実に羅漢を得て亦自ら究竟と謂う。兩人何んが異なるや。答う、兩人未だ法華を聞かざる(とき)は、自ら謂うこと略同じ。若し法華を聞くも、則ち五千の凡夫は信受を生ぜず、聖人は則ち信を生ず。故に文に云く、若し実に羅漢を得て若し此の法を信ぜずといわば、是の処あることなしと。(前同、大正蔵三四卷、四九八頁中)

と、法華を聞かないうちは、五千の増上慢と大同小異である。しかし法華を聞かば、「若有比丘実得阿羅漢、若不信此法、無有是処」とあるごとく、三根の声聞は必ず一乗を信ずるが故に、聞いても信受しない五千の増上慢とは全く異なると定義する。

究竟と思ひ込んでいる声聞が、法華の三周により廻小入大するこの事と、『勝鬘經』の「三乗初業、不愚於法、於彼義当覚当得」の内容とを、どの様に会通するかと云う事について既に論述した。その要点は、有人説では、愚法の人_が本乗声聞であり、一乗を聞き三乗が究竟の教であると云う思ひ込みを捨て、廻小入大する二乗である。又不愚法とは退菩提心の声聞の事で、法華に依らずとも自ら作仏を知る声聞と主張した。この有人説に対し吉蔵は、舍利弗等が法華經を聞き作仏を知るのだから、舍利弗等は愚法の人となる。又舍利弗等は退菩提心の声聞であるから不愚法の人となる。つま

り有人説で解釈すると、舍利弗は愚法であり不愚法の人と云う矛盾が生ずると有人説を否定する。そして吉蔵自らの説は、本乗の声聞も退菩提心の声聞も、究竟と思ひ込んでいるうちは、愚法の声聞と主張する。しかし若し一乗を聞いて廻小入大するならば、共に不愚法の声聞と考へるといふ内容であつた。⁽⁶⁾

以上により、舍利弗等の三根の声聞は阿羅漢果を以て究竟と思ひ込む愚法の増上慢の声聞である。しかし法華一乗の教を聞いて必ず廻小入大する退菩提心の不愚法の声聞でもある。

二、退菩提心の阿羅漢の大機未熟について

所で前回の拙論中「小乗義、忍法之前、三乗未定。忍法則定也。」等と、忍位以上になると定性となつてしまひ、転向不可能と云う事について論述した。⁽⁷⁾しかし今まで論述して来た内容は、「答う、通じて説かば、一切の自ら究竟の羅漢と謂へるものなれども、而も正しく主たるは、三根の声聞是なり。」と云う事である。即ち理論的には全ての阿羅漢がその対象となるが、実際には身子迦葉等の三根の阿羅漢が、廻小入大出来る対象であると説く。この為忍法以上の阿羅漢が転向すると説き、矛盾する。

それではどうして三根の阿羅漢の声聞が転向できるかと云

うと、

理に就いて明さば、三根の声聞、道縁に熟すべければ、如来法身に居して彼の機縁を照したもう。故に応を垂れて成仏したもうなり。(法華義疏、卷第七、大正蔵三四卷、五四六頁中)

或は、

始には大を稟くるの機なしと雖も、終には一を悟るの理あり。(前同、大正蔵三四卷、五四八頁上)

と、道理から云つて三根の声聞は、機さえ熟しさえすれば、廻小入大の菩薩にと転向出来、未来に成仏すると考へるからである。即ち機が熟しさえすればとは、三根の声聞が退大為小の阿羅漢であつて、大乘の機がある事による。先に、「身子即其人也。雖云二本是小乗已得煖頂。次捨小求大、六十劫行菩薩道。後值乞眼、故還捨大取小。今聞法華還捨小求大。」と、身子(舍利弗)が忍法以前の未定根の時に、小乗を捨て六十劫も菩薩道を行じた退大為小の声聞である事は述べた。⁽⁸⁾この事により、

又身子は昔大乘の因を行じて、現在に大を悟り未来に成仏す。(法華義疏、卷第五、大正蔵三四卷、五一六頁中)と、身子には昔修した大乘の因により、現在大乘を悟り未来に成仏すと云うのである。又三根の声聞に対しても、

三根の声聞は久劫より已來曾て大心を発し菩薩の行を修

す。但中途に忘失して暫く小果を證せしが、今大乘を聞いて還つて本悟を得たり。故に現在に記を得て未來に成仏すと明す。（法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五六八頁上）

と、やはり昔菩薩行を修した退大為小の阿羅漢である。又中根の迦葉に対しても、

二示三種子無上義。種子無上者、如言汝等所行是菩薩道、明下迦葉等曾發菩提心、中忘斯意、今還發心行菩提道、必當作仏、故是種子無上。（法華玄論、卷第一、大正蔵三四卷、三六八頁下）

と、曾つて菩提心を發したその種子により、作仏すると記す。「汝等所行是菩薩道」に對し吉蔵は、

叙三声聞人、有三時。一過去本發菩提心時、二者中間退菩提心時、三者聞法華經還發菩提心時。今即取前後菩提心、為三種無上。故取此文而積之也。所修行善根不滅同後得果故者、過去發菩提心、行菩薩行、中間雖退而菩提心種子不滅。如攝大乘論云、此種子並附著梨耶。（法華論疏、卷下、統蔵一輯、第七四套第二冊百八十九丁d—百九十丁a）

或は、

汝等の所行は是れ菩薩の道なりとは、謂く菩提心を發して退し已つて還發す。前に修行せし所の善根滅せず、同

じく後に果を得るが故にと。此の意は、本の菩提心滅せざるが故に此の善根は即ち無上の種子なりと明す。（法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五六五頁中）

と、曾つて菩提心を發した種子は阿梨耶識に附著して、途中小乘に轉向しても滅せず、この無上の種子により阿羅漢になつても廻小入大の菩薩となり、未來に成仏出来るのである。

所で華嚴の時、

但尽くは受くる能わずとは、仏の授くる能わざるに非ずして、但衆生が尽くは受くる能わざるを明すなり。此は昔の三乗の衆生に拠つていう。唯菩薩のみ能く大を受け、二乗人は大を受くる能わず。是の故に一仏乘に於て分別して三と説きたもうなり。（法華義疏、卷第六、大正蔵三四卷、五三二頁上）

と、仏は成仏の記を繪てに授け様と思つのであるが、これに對し菩薩のみが大乘を受け入れる能力がある。しかし二乗人は大乘を受け入れる能力がなく、この故に二乗の為に「於一仏乘、分別説三」と説くことになる。華嚴教を菩薩は受け入れ、二乗は受け入れる能力が無い。その相違点は、菩薩にも又三根の声聞にも大乘の機が共にあるが、大乘の機が熟か未熟かによる。即ち、

昔、声聞は大機未だ熟せざるが故に之が為に小を説き、

菩薩は大機早く熟せるが故に之が為に大を説けり。是を以て二教各二縁に赴きしなり。今靈山の会に至っては、声聞も菩薩も大機並に熟せり。是の故に二縁同じく一教を聞き並に皆成仏す。(法華義疏、卷第四、大正蔵三四卷、五〇二頁上)

或は、

答う、初成道の時に抛らば、大機未だ熟せず。是の故に謗を起すべし。靈山の会に至らば小執を改めて則ち能く信受す。根性不定なるを以ての故に或はと称するなり。

(法華義疏、卷第五、大正蔵三四卷、五二四頁中)

と、初成道の華嚴の時は、菩薩のみ大乘の機が既に熟しているから大乘の教を受け入れる。しかし声聞は、大機未熟の故に華嚴の時に大乘教を受け入れることが出来なかつた。その後、法華の靈山までにて大機が熟したるが故に、廻小入大して菩薩となり未来に成仏する。この為途中の波若の教ではまだ、

但二乗、波若の坐に在りしときは、大機未だ熟せざりしが故に、(後略)(法華義疏、卷第七、大正蔵三四卷、五四頁中)

或は、

未だ人を会せずとは、但二乗の人は大品の時に至るまで大機未だ熟せず。故に未だ人を会せざるなり。法華には

吉蔵の成仏不成仏觀(八)(末光)

則ち人法俱に会す。人を会するが故に同じく菩薩と名け、法を会すれば名けて一乗となす。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四八三頁下)

と、声聞の中にある大乘の機は当然まだ未熟である。この為論に自ら釈して云く、波若には未だ羅漢の作仏を明さず、但菩薩の作仏を明す。(法華義疏、卷第十一、大正蔵三四卷、六一九頁上)

と、波若教中では、阿羅漢の作仏をまだ説かず、菩薩の作仏のみを説く事となる。そしてついに法華に至って、羅漢の大乘の機が熟したるが故に、

一には諸人皆羅漢と成つて大機熟せんと欲するを見るが故に、為に大乘を説きたまえと請す。(法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五七三頁上)

と、大乘を説き阿羅漢の作仏を示す。羅漢の人を会すを菩薩と云い、三乗の法を会すを一乗と云い、法華は人法を俱に会す事になる。

三、大機の未熟と五濁について

所で三根の阿羅漢にも、曾ての大乘の機が残っているにもかかわらず、大乘の機が未熟故法華までかかつて調柔するのは、五濁による。

是の故に釈して云く、道理は一のみあって三なしと雖

も、但汝等五濁の障り深くして一を受くるに堪えざるが爲に、是の故に諸仏方便して三と説きたもう。過は衆生に在りて咎諸仏に非ざるなりと。（法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九七頁上）

或は

故に諸仏一仏乘に於て分別して三と説きたもうとは、上は五濁増盛にして一を受くるに堪えざることを明せしが故に、今方便して三と説くことを明すなり。（前同、大正蔵三四卷、四九七頁下）

或は、

何故不_レ発軫即説_二一乘_一、而前説_三三乘_一、後明_二一乘_一耶。為_レ積_二此疑_一故、云_二衆生五濁障不_レ堪_レ聞_一。是以先_三後一過_一、在_二衆生_一非_二仏咎_一也。為_二此義_一故、又明_二五濁_一也。（法華玄論、卷第五、大正蔵三四卷、四〇四頁中）

と、道理は一乗のみであるものを、分別して三乗と説くのは、五濁の障害が強すぎて、直ちに一乗の教えを受け入れる事が、二乗には出来ないからである。

五濁とは劫濁・煩惱濁・衆生濁・見濁・命濁⁽¹⁰⁾であるが、これらを濁と云うのは、

問う、云何んが濁と名くるや。答う、濁は是れ不浄の義なり。譬えば濁れる水には物を見ること能わざるが如く、衆生の心濁りぬれば一乗の理を知見すること能わ

ず。故に濁と名くるなり。（法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九七頁中）

或は、

以_レ有_二此五_一、皆不_レ得_二一乘浄觀_一、障_二翳正道_一。豈非_レ濁耶。要須_二洗_レ之觀心乃浄_一。（後略）（法華玄論、卷第五、大正蔵三四卷、四〇四頁中）

と、不浄の意味であり、一乗の浄觀、正道の障害となるからである。これを譬えれば、濁った水を通しては物を見ることが出来ない様に、衆生の心が濁った水の様であるならば、一乗の理も知見する事が同様に出来ない。この故に濁と云うのであり、この五濁の為に三乗の方便を説くのである。とは云うものの、

問う、五濁は俱に一と三とを障う、何が故に三を説いて一を説かざるや。答う、一は深く三は浅ければ、五濁ありと雖も三乗を説くことを得。（法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九七頁中）

と、五濁は一乗のみならず三乗に対しても障害となる。しかし一乗は深い内容であるに対し三乗の内容は浅いものであるから、五濁が共に障害になっても、障害の割合の少い三乗をまず先に説く事により、方便の由漸・実益の働きにより、大乘の機が熟す。

所で五濁の有無にかかわらず、法華経を聞くか聞かないか

の相違が生ずるのは、一乗・大乘の機が有るか無いか、或いは熟か未熟かである。

然も四句あり、一には五濁あつて一乗を障う。則ち昔声聞人の一乗を聞くに堪えざる是なり。二には五濁一乗を障えず。謂く、凡夫人五濁あれども一乗教を聞くことを得る是なり。問う、同じく五濁あるに何が故に一乗を聞くことを得ると一乗を聞くことを得ざるとありや。答う、同じく五濁ありと雖も、但一乗の機あれば則ち聞く。なければ則ち聞かざるなり。三には五濁なくして一乗を聞くことを得。即ち法華会の声聞是なり。四には五濁なくして一乗を聞かず。謂く、法華を聞かざる声聞是なり。問う、同じく五濁なきに何が故に聞と不聞とあるや。答う、同じく五濁なしと雖も、但一乗の機あれば則ち聞く。なければ則ち聞かざるなり。(前同頁)

即ち、第一は五濁有一乗機無、第二は五濁一乗俱有、第三は五濁無一乗機有、第四は五濁一乗機俱無である。この中一乗の機のある第二と第三は、五濁の有無にかかわらず、一乗の教を聞く。しかし一乗の機のない第一と第四は、五濁の有無にかかわらず、一乗の教を聞かない。尤も第一の場合、「則ち昔声聞人の一乗を聞くに堪えざる是なり」とある事から、一乗の機が無と云うよりは、一乗の機が未熟の故に一乗をまだ聞き入れる事が出来ない意味である。一乗の機の未熟

を熟にするその目的は、

問う、一乗の機あれば則ち聞き、なければ則ち聞かざるといわば、云何ぞ五濁一乗を障え一乗を障えざるや。答う、五濁は必ず一乗を障う。但し一乗の機は強く五濁の障は弱し。是の故に聞くことを得るなり。(前同頁)

と、五濁は必ず一乗の障害となる。しかし五濁の障害より、一乗の機の方が強くなりさえすれば、一乗の教を聞く事が出来るからである。これを大地と植物の芽との關係に譬える。

問、但由_二機熟則聞、不_レ熟則不_レ聞、則五濁不_二名為_レ障也。答、五濁必是障_レ法。但機熟故不_レ能_レ為_レ障耳。如_二地必是障_レ法、但物欲_レ生時、地不_レ能_レ障耳。(法華玄論、卷第五、大正蔵三四卷、四〇五頁中)

即ち五濁は必ず一乗の法の障害となるが、機が熟しさえすれば障害ではなくなる。それはあたかも大地が、植物の芽の生ずる障害となつていても、時が来て芽が出る時には、どんなに固い土も、障害とならなくなるのと同じである。

この故に、三根の声聞も一乗の機を強くして、五濁の障害を打ち破る必要がある。

問う、三根の声聞は大通智勝仏の所にして已に一乗を聞く。則ち一乗の機あり。阿羅漢を得て後、何が故に法華を聞かざりしや。答う、一乗の機ありと雖も、但し三執

既に強くして、一乗の機は弱し。要す諸の方等經を聞き、其の心を陶練するを待つて、方に法華を聞くに堪えたるなり。（前同頁）

即ち、身子等の三根の聲聞には、大通智勝仏の所にて已に一乗を聞き、一乗の機が有る。それなのに阿羅漢果を得て後、どうして直に法華の教を聞く事が出来ないのかと問う。その答えは、身子等には一乗の機があつても、一乗の機より三乗の執が強い。この為身子等の三根の阿羅漢に対して、般若等の方等經を聞かせその心を陶練する。この陶練を経て、一乗の機が弱から強に、未熟から熟にとなり、五濁の障害を打ち破る力を得て、正に法華經を聞くに堪えられる様になるのである。

以上の事からも判る様に釈迦が、この世に出世するのは、五濁の為である。次に示す四門、或はかの三種法輪説も、五濁の衆生の調柔、陶練の為である。

総じて諸仏は五濁世に出で、方便して三と説きたもうことを弁じぬ。今の文には広く之を釈し、釈迦五濁の世に出でたもうことを明す。一期の所化に凡そ四門あり。第一には、法身の地に居して、五濁の衆生の苦あつて楽なきを見るが故に、大悲心を起したもう。第二には、悲心内に充ちて本を以て迹を垂る。初成道の時に一乗を説き、物の極苦を抜いて其の極樂を与えんと欲せしが、但

し聖は能く物に授くと雖も、物受くること能わず。是の故に一の化を息めたもう。第三には、既に一の化を受くるに堪えざるが故に、一仏乘に於て方便して三と説き、其の心を調柔したもう。第四には、三を会して一に帰することを明すなり。此の四門は皆五濁より起れり。故に是れ上の五濁の章門を釈するなり。初に五濁を見るが故に大悲心を起し、五濁あるを以て一の化を受くるに堪えず。五濁あるに由るが故に方便して三と説き、五濁の障消するが故に後に為に一を説く。是の故に四章は皆五濁より起れるなり。（法華義疏、卷第四、大正蔵三四卷、五〇六頁中）

或は、

問う、此の四門に幾種の教を具するや。答う、此の四門に三教を具す。如来法身の地に居して、五濁の衆生の一期始終の根性応に具に三種の教門を聞くに堪えたるべしと照し、次に本を以て迹を垂れ、衆生の為の故に三種の教を説きたもう。初成道の時に諸の菩薩の為に根本法輪を説き、第二門には根本法輪を受くるに堪えざるが故に、本より末を起して枝末法輪を明し、第三門には三を会して一に帰するが故に摂末歸本法輪を明したもう。

（前同、大正蔵三四卷、五〇六頁下）

と、釈迦が五濁世に出で、方便して三と説くのは、聲聞を廻

小入大させる為である。即ち衆生に五濁あるが故に仏が大悲心を起し、又五濁あるが故に、機が未熟で一乗の化を受けられず、又五濁あるが故に方便して三と説き、一乗の機を調柔し、その結果五濁の障害が滅し一乗の機が熟するが故に一乗を説く。この衆生の五濁の為の故に、釈迦は出世するのである。

四、二乗の分段・四住と菩薩の変易・五住

初に「羅漢を大乘に望むれば、実に究竟に非ざるに、自らは究竟と謂えり。」と云う事を述べた。と云う意味の中には、この小乗における究竟の阿羅漢果が、大乘の因へと継続し、大乘の十信(11)と繋がる、吉蔵は考えている。

汝等が所行は是れ菩薩の道なりというは、謂く真実の相を示すなり。昔は大因を悟らずして小果となしき。故に小果を執じて大因に迷えり。今は小果は是れ大因なることを悟る。故に便ち大因あり。大因あれば必ず大果を得。故に授くるに仏果を以てするなり。(法華義疏、卷第八、大正蔵三四卷、五六五頁下)

或は、

昔大因を説いて小果となせしを、一に於て三と説くと名く。今は小果即ち是れ大因なりと悟るが故に、大乘を失わざるなり。(法華義疏、卷第五、大正蔵三四卷、五一

四頁上)

或は、

因を会すとは、小乗の因を会して大乘の因を成ず。別の小乗の因なきなり。又是れ其の因を奪う義なり。果を会すとは、小乗究竟の果あることなし。小乗究竟の果は還是れ大乘の因なるが故に、小乗の因果並びに大乘の因に属す。(勝鬘宝窟、卷中之末、大正蔵三七卷、四四頁下—四五頁上)

と、「汝等所行、是菩薩道」に種子無上の意味があると同時に、「小果は是れ大因なること」の意味がある。即ち「於一仏乘、分別説三」は、大乘の因が小乗の果と云う意味であり、逆に会三歸一は、小乗の果が大乘の因になると云う意味である。その意味では小乗の果のみならず小乗の因も、大乘の因に属する事になる。これは以前論じた出生收入(12)の事であり、「小因小果、皆一乗の法に入り、因人果人、皆菩薩の人と成る」(13)と云うのが收入を示すものである。

それでは、小乗の阿羅漢果が、大乘に比べ非究竟であり、大乘究竟の因につながると云うのはどのような意味かと云うと、

今、前に我生已尽を明す中、正に二種の生死ありと云うは、昔一生死を断じ尽くすに就いて、権りに究竟と言えり。余に一生死の在るあり。故に究竟ならざるなり。是

の故に今昔の教、相違せず。余の三智も亦尔り。（宝窟、卷中之末、大正蔵三七卷、四八頁中）

と、阿羅漢は二生死中の一生死のみを断じたので、仮りに究竟と云うのである。しかし更に余の生死があるが故に非究竟と云う。ここに出て来る我生已尽智と残りの梵行已立智・所作已弁智・不受後有智を合わせて四智と云う。

得少分と名くるは、是れ小涅槃なり。涅槃を滅と云う。但、分段の因果を滅す。故に少分と名く。（中略）、向涅槃とは、大涅槃に向うなり。良に以みれば、二乗は此等を成ぜず。故に四智究竟せざるなり。（前同、大正蔵三七卷、五五頁下）

小乗は、大涅槃の少分を得たるにすぎない。それは前の一死、即ち分段の因果を滅したのみにすぎず、大涅槃の四智を究竟していないが故に、非究竟となる。梵行已立智に対して

も、
今の文に梵行已立と明すは、是れ證滅智なり。若し有余無余に就いて論ずれば、分段尽くる処を名けて有余と曰い、変易尽くる処を説いて無余と為す。二乗は但、分段尽くる処を得るを名けて有余證と為す。如来、此に就いて、其の梵行已立を説く、故に是れ方便なり。（前同、大正蔵三七卷、四九頁下）

と、分段を尽くす処を有余と云い、変易を尽くす処を無余と

為す。二乗は但分段生死、即ち梵行已立智の有余を尽したのみで、まだ変易生死の無余を残すから、阿羅漢果はまだ方便であり、不究竟となる。この故に、

如来、昔、二乗に四智究竟ありと説く。今何故ぞ不究竟と云うやと。（前同、大正蔵三七卷、四八頁中）

と、昔は二乗の果が四智究竟と説き、今は不究竟と何故に云うかと云う問いに、以上の様に答えたのである。即ち

此の経に云く、苦に二種あり、一には分段生死の苦、二には変易生死の苦なり。二乗は分段の苦を断ずと雖も、変易猶在り。故に有余と云う。尽きざるを以ての故に、当に更に生あるべし。所以に我生已尽智是れ断苦智なり。故に当に更に生あるべし。（前同、大正蔵三七卷、四六頁中—下）

或は

此の経は集を明すに二種あり。一には分段の因、二には変易の因なり。二乗は分段の因を断ずと雖も、変易の因在るを不度彼と名く。故に当に必ず断ずべし。（前同、大正蔵三七卷、四六頁下）

と、生死には分段と変易がある。阿羅漢はまだ分段生死のみを断じたのにすぎない。更に大乘の究竟の変易生死が未断尽の故に、阿羅漢果を尽しても不究竟となる。

所で吉蔵は、五住地煩惱とこの二種生死を次の様に対応さ

せている。

問う、何れの処に解脱の徳を明すことありや。答う、譬喻品に云わく、二乗は但虚妄を離るるを名けて解脱となし、其の実に未だ一切の解脱を得ずと。但虚妄を離るるを名けて解脱となすとは、但三界の分段と及び見思の惑とを免るるなり。若し具に五住を断じ備に二死を傾くれば、一切の解脱と名く。正しく此の法を用いて二乗を簡異し、保三を捨てて一極に帰せしむるなり。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四八四頁中)

或は、

但虚妄を離ると言うは、四住の煩惱は是れ凡夫の所起なり。能く分段虚妄の生死を感じず。故に虚妄と称す。小乗は但此の虚妄を離る。故に仮に名けて解脱となすのみ。其れ実には未だ一切の解脱を得ずとは、未だ具に五住を断ぜざるが故に、一切の解脱と名けざるなり。仏是の人未だ実に滅度せずと説きたもうとは、第二に今昔の無余権実を明すなり。昔は但分段生死を滅するを称して滅とせり。此は実の滅には非ざるなり。斯の人未だ無上道を得ざるが故にとは、昔は未だ実の滅にはあらず。無上道を得る者、二生死の果を滅して方に乃ち実を滅するのみ。此の文には昔の小涅槃は、但四住を滅し但分段を滅す。大乘は則ち具に五住を断じ備に二生死を傾くと明せ

吉蔵の成仏不成仏觀(八) (末光)

り。(法華義疏、卷第六、大正蔵三四卷、五四〇頁中)

と、二乗の涅槃と云うのは、但四住の煩惱・分段生死を滅したのにすぎない。しかし大乘の場合は、無明住地を含む五住地の煩惱をも断じ尽くし、分段のみならず変易生死をも断ずると説く。「小乗の滅は狭し。但四住及び分段の生死を滅するのみ。大乘は具に五住及び二死を滅す」と云う主張となるのである。

この五住地煩惱と、身子等の三根の阿羅漢との關係を、次の様に論じている。

問う、何の惑障を以てか三根解せざるや。答う、此れ九十八使には非ず。何を以てか之を知る。羅漢の人は四住の惑傾けども、而も猶未だ一実を解せず。故に知んぬ九十八使に非ざるなり。五住の中には正しく是れ無明住地なり。二障の中には智障の惑たり。此の惑の中に就いて開いて三品となす。輕品の惑は上根を障え、次品の惑は中根を障え、重品の惑は下根を障う。問う、此の惑は云何が三根を障うるや。答う、此の惑あるに由つて権実に迷う。故に三乗は是れ權にして一乗は実たることを識らず。亦一乗は本有にして二乗は本無なるに迷う。故に三根を障うと名くるなり。(法華義疏、卷第三、大正蔵三四卷、四九三頁上)

即ち、阿羅漢は、四住地煩惱を断じているから、見思の九

十八使の煩惱を断じ、まだ無明住地、所智障の惑が残っていることになる。この残りの無明住地、所智障の惑の中で、軽品の惑が上根を障え、中品の惑が中根を障え、重品の惑が下根を障える。この惑が三根の声聞に対し、三乘方便一乘真實、一乗本有二乗本無なることの障害となる。

以上論述して来たごとく、小乗の果は大乗に比べ非究竟なるものの、先に示したごとく「小乗究竟の果は、還是れ大乗の因なるが故に」と、小乗の教えが大乗の教えにと継続している。この為、

大乘の法を離れて別の小乗の法なし。亦大乘の菩薩を離れて別の小乗の羅漢なし。小乗教を会して大乘教に入る、即ち是れ教一なり。小乗の行を会して大乘の行に入る、即ち是れ因一なり。小乗の人を会して大乘の人に入る、即ち是れ人一なり。小乗の果を会して大乘の果に入る、即ち果一なり。（宝窟、卷中之末、大正蔵三七卷、四四頁下）

と、大乘の法と小乗の法、又大乘の菩薩と小乗の羅漢とは無関係なものではない。小乗教を会して大乘教に入る教一等のごとく、小乗の教や行や人や果が、大乘の教や行や人や果にと繋がって行くのである。吉蔵は三乗の教えを劣るものと云う意味でとらえるよりも、寧ろ声聞をも廻小入大させる実益⁽¹⁶⁾・由漸の働きを持つ方便の教と考える。この故に「小乗の興

廢を離れて、別の大乘の興廢なし⁽¹⁷⁾」と云う言葉となるのである。

尤も、「凡涉三名言、皆非三究竟」と云う点では、分段も變易も非究竟の方便である。

第四に大意門とは、諸法実相は言亡慮絶なり、未だ曾て生死せず。未だ曾て涅槃せず。但、顛倒の衆生に於ての故に生死を成ず。彼の生死に対するが故に強いて涅槃と名く。但し虚妄に其の重軽あり。虚妄重き者は説いて分段と為し、虚妄軽き者は称して變易と為す。蓋し是れ聖人善巧方便して虚妄顛倒に随うが故に、二死の名を立つ。此れ空華を分別し、陽炎を談道するが如し。実二の妄解を作す勿れ。此は興皇師の大意なり。（宝窟、卷中之末、大正蔵三七卷、四九頁上）

即ち、実相の立場から云うならば無名相のものであるものを、衆生の虚妄顛倒に随って、虚妄重き者に対しては分段と説き、軽き者に対しては變易と説く。三乗一乘同様に、分段變易も、二乗と菩薩に対する善巧方便の教導方法である。分段生死とか變易生死と云うものが、実にあると云う妄執妄解をなしてはならない。この様に解するならば、本師興皇寺法朗（五〇八―五八一）の本意にかなうと述べ、二種生死への固執を否定する。

結 言

吉蔵は、大乘の諸經典が皆究竟の教であるに對し、小乗の教は非究竟であると考え。しかるに小乗における究竟の果を得たのにすぎぬ阿羅漢は、これを究竟と思ひ込み満足し、大乘の究竟の教えに入らうとしない増上慢である。しかし舍利弗や迦葉等の三根の声聞は、必ず法華經を聞いて廻小入大する不愚法の阿羅漢である。

この身子等の三根の阿羅漢が、廻小入大出来るのは、退大為小の声聞だからである。即ち曾て菩薩行を修した種子が阿梨耶識についている。その残っている大機が、初めは未熟なるが故に愚法の人となる。しかしその大機をだんだん調柔して、法華經にて大機が熟したるが故に菩薩に転向して、不愚法の人となるのである。

退大為小の阿羅漢の一乗の機が、最初未熟なのは五濁の障害の為である。五濁の障害の為に、一乗の機が有りながら、一乗の理を見させなくしている。そこで五濁の障害よりも一乗の機を強くすれば、五濁の障害を打ち破ることが出来る。この為三乗の方便を説き、一乗の機を未熟から熟にと変え、法華にて五濁の障害をこえる。故に釈迦は、五濁の衆生の救済の為に、この世に出世したと云うことになる。

所で最初阿羅漢果は、大乘に比べ未究竟と述べた。その意

味は、阿羅漢が分段生死、四住地煩惱のみをただ断じたのみにすぎず、更に變易生死、無明住地を含む五住地煩惱を総て断じていないからである。分段、四住を断じた阿羅漢も、大機が熟することにより一乗に転向し、残りの變易、無明住地の煩惱、所智障をも断ずる菩薩となれる⁽¹⁹⁾。以上により吉蔵は、三乗教を劣ると云う意味よりも、実益、由漸の働きを持つ方便と考え、「小乗の興廢を離れて、別の大乗の興廢なし」と主張する。尤も名言による分段も變易も、妄執妄解をなくす方便であり、非究竟の中途のものなるが故に、固執すべきものではない。

註

- (1) 「吉蔵の成仏不成仏觀」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十五号、昭和六十二年三月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(二)」(駒沢大学仏教学部論集、第十八号、昭和六十二年十月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(三)」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十六号、昭和六十三年三月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(四)」(駒沢大学仏教学部論集、第十九号、昭和六十三年十月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(五)」(駒沢大学仏教学部論集、第二十号、平成元年十月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(六)」(駒沢大学仏教学部研究紀要、第四十八号、平成二年三月)、「吉蔵の成仏不成仏觀(七)」(駒沢大学仏教学部論集、第二十一号、平成二年十月)

(2) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀(七)」三四八頁。

(3) 法華玄論、卷第七、大正蔵三四卷、四一七頁下。

(4) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀(七)」三四七頁。

- (5) 法華經、方便品第二（卷第一、大正蔵九卷、七頁下）
- (6) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀」二八四頁―二八五頁参照。
- (7) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀（七）」三四五頁参照。
註7に同じ。
- (8) 法華經、藥草喻品第五（卷第三、大正蔵九卷、二〇頁中）
- (9) 法華經、方便品第二（卷第一、大正蔵九卷、七頁中）
- (10) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀（三）」二四二頁参照。
- (11) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀（五）」二三八頁以下参照。
- (12) 宝窟（卷中之末、大正蔵三七卷、四三頁中―下）
- (13) 勝鬘經、一乘章第五（大正蔵十二卷二一九頁下）
- (14) 法華義疏、卷第四（大正蔵三四卷、五〇四頁上）
- (15) 註1「吉蔵の成仏不成仏觀（六）」九八頁―一〇三頁参照。
- (16) 宝窟、卷中之末（大正蔵三七卷、四四頁中）
- (17) 三根の声聞に關しては、拙論註1「吉蔵の成仏不成仏觀（二）」
（三五六―八頁）参照。
- (18) 『仏教思想史』5 八 仏教内部における対論▽日本、田村晃祐
「天台宗と法相宗の論争」(一)「無余涅槃からの廻入」(三六頁
―三八頁)、又寺井良宣「無余界における回心をめぐる一乗・
三乗の論争」(天台眞盛宗宗学研究所紀要、第四号、平成元
年八月一日) 五一頁等参照。
- (19)